
異世界の花嫁

異崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の花嫁

【著者名】

異崎翔

【あらすじ】

お姫様よりもメイドに憧れていた私は、17になった今メイド喫茶でバイトしていた。店のゴミだしをしに行つたら、不意に現れたブラックホールもどきにメイド服のまま吸い込まれてしまふ。ついた先はなんと異世界で、私は召喚された花嫁だつた！

第一部

幼い頃、女の子なら誰しも一度は願うであろう『大きなお城に住む綺麗なお姫さま』。

でも私は違った。

普通の子たちよりも、少しズレていたのだ。

私は『大きなお城に住む綺麗なお姫さま』よりも、『大きなお城でお姫さまに仕えるメイド』をやってみたかった。

そんな非現実的なことを17になつた今でも夢見ているわけではな
いけど、真似事はしてみたかった。

だから。

チリンチリン、とベルが鳴る。

それと同時に入ってくる一人の男性。

私はその人たちに笑顔を向け、深々と頭を下げる。

「お帰りなさいませ、ご主人様っ」

黒い服に、フリフリのHプロン。
いわゆる『スロリメイド服』。

私は絶やさず笑顔を振りまき、この店のお客様、つまり『主人様』の命令に従う。

ご主人様達が全員帰ると、今日の『メイド』は終わり。

「お疲れ様でした」

「うん、お疲れ様！ 美和ちゃん今日、悪いんだけど『ミ出しへおいてくれる？」

「はい、わかりました」

店長はすまなそうに両手を合わせると、すぐさま何処かへ行つてしまつた。

なにか用事があつたんだ。

私はメイド服のまま、自分の荷物と『袋』を両手に抱えて裏口から『ミニステーションへと足を運ぶ。

「はああー、疲れたなあ」

そんなことを言いながらも私は「//」を置き、手を離れた。

でも、手が「//」から離れない。

「へ？」

なんで？

瞬間接着剤とか誰かつけてた！？

私の頭の中はもうパニック状態！

あれよこれよと考えていると、手がズンッ、と沈んだ。

「は？……え」

見つけたのは黒いブラックホールのような空間。
そこにあつたはずの地面は消え、私はその中にズルズルと引き込まれてしまった。

「あやあああああああああ…？」

「んッ！」

大きな音が聞こえた瞬間、お尻に激痛が走る。

「いっ……ー？」

半分涙目になりなつていて、両手についていたゴミがストン、と外れた。

うつむいていたら床がとても綺麗なことに気づき、自分の姿がうつっていた。

黒髪黒目の、平凡そうな顔立ち。

顔の下にはフリフリの白いレースがついた、メイド服。肩には自分のバックがかっている。

「おい、俺にこんなゴミ持ちの女と結婚しろと言うのか？」
「はあ、しかしきてしまつたからには、かなりの魔力の持ち主です
し…」

突如聞こえてきたそんな会話。

私はいまいちすつきりしない頭を上げ、見てみると。

神々しいくらいに美形の金髪碧眼の男性が、美しい顔をこれ以上な
いぐらじに歪め、こすりを見据えていた。

…………って、え。

「…………ですか！？」

「だが、この娘に魔力があるとは思えん。魔力も感じない」

金髪の、神様ですか？と聞きたくなるくらい美形な男性は、隣にいるご老人に言う。
それにご老人も答える。

「ワシも何も感じませぬ。ですが殿下、この儀式で呼ばれる者は皆強大な魔力を秘めた者」

「俺とてそれくらい知つていて、だがこの俺にでさえ、この女から魔力を微量も感じぬのだぞ？」

聞こえてくるのは魔力とか、儀式とか、そういうた単語ばかり。頭が混乱しそぎていて、何をどうすればいいのかさっぱりわからな
い。

私はとりあえず頭を整理させようと、深呼吸をする。

その後辺りを注意深く見渡してみた。

とりあえず目に付くのが、たくさんの人。

鎧のようなものを着た男の人たちや、巫女さんのような服をきた女の人たち。

…………「」は「スプレ喫茶か何かですか？」

それにしては皆表情が硬い。

私がもう一度、男の人のほうへと向き直ると、彼と私の視線が合つ。

「お前、名前は？」

「へ？ あ……美和、です」

名前を聞かれていると時間差で認知し、急いで自分の名前を言つ。すると彼は微笑んだ。『ニヤリ』と、効果音がつきそうな勢いで。その笑みはどこか裏がありそうな、なにかを企んでいそうな笑み。

背筋が本能的に凍る。

私の頭は「この人危険！ 逃げろ！」と叫んでいる。

「あ、あのっ」

「ん？」

私の必死の声に、彼は首をかしげた。

その仕草がとても似合つていて、より格好良く見えてしまい、一瞬見ほれてしまう。

けれど私はそんな乙女チックな感情を振り払つように頭を振ると、一番聞きたいことを聞いた。

「あの、」には一体どこなのですか？ なぜ私はこんな所にいるのでしょうか…」

すると彼は「あ、忘れてた」とでも言つような表情をしてから、ご老人のほうを見る。

それに対して「老人は大きく咳払いをし、話し始めた。

……私の問いに答えてくれているようだ。

「ゴッホン！ まず、ここはレイアント大国の中央都市、シルフォニア。貴女は我等の次期主、クロウ・レインアント様の花嫁として召喚されたのです」

「へー花嫁。……って、花嫁！？」

「はい」

あっさり返答するご老人。

「とりあえず、なぜ花嫁をその、召喚？ するのですか？」

自分の国の人と結婚すればいいのに。
だが、そんな考えもすぐにご老人に否定される。

「この国の女性で、クロウ様の魔力に耐えられる女性がいなかつた
のです。いても既婚者か近すぎる血筋の者。最終手段として召喚と
いう儀式が用いられ、貴女が選ばれたわけです」

「ちょ、ちょっと待つてください」

「なんでしょう？」

「魔力、とか召喚とか…。非現実すぎてついていけないのでですが」

よく小説や漫画などでそういうた作品は多々あるが、いざその状況

に立つてしまつともく思考をコントロールできない。

私が試行錯誤しているとクロウ…さんという男性が言ひ。

「そうだな。お前はいわば異世界から来た人物だ。詳しいことは後日話すとして、今日は休めば良い。まあ、まさか異界人がこういった服装を常時着用し、「ゴミ」と一緒に来るのは思わなかつたが」

そういつて私の服を指差し、くくくと笑つた。

それに流されるように私は視線を自分の服へうつす。

メイド喫茶のメイド服。

それも限りなくゴスロリに近いもの。

そのうえ私は「ゴミ」を両手に持つていたのだ。

……最悪の登場。

「べ、別に私の世界の人人が常時こういつた服を着ているわけではありますん！ むしろこういう服装の人は限りなく少ないかと…！」

とにかく、私は今頃きた恥ずかしさに赤面しながら弁解する。

それにわかつたわかつた、と面白おかしそうに笑う彼に、少しだけ親しみやすい人かな、なんて思つてしまつた。

第一部（後書き）

お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございました。
今後も温かい田で見守って下さると幸いです。

その後私は「とつあえず、今日はゆっくり休め」と促されて、今日から自分の部屋になるらしい部屋へと本物のメイドさんみたいな女性に案内された。

部屋は机とイス、ベッドがあるだけの殺風景な部屋だつた。私はメイド服を脱いで、メイドさんらしい方にもらつたネグリジェに着替える。

自分の服があるからいいと断つたのだが、妃がそんな服を着ていてはいけないとかなんとかで、半ば無理やりもたされた服と言つても過言ではないだろう。

私は着替えると、ダイブするよつにベッドにもぐつた。
ベッドは今までに経験したことがないくらいにふかふかで、目がさえてしまつ。

見知らぬ天井。
見知らぬ世界。

感じたことのない高級そうなベッド。
見たことのない人たち。

正直、不安で仕方がなかつた。

今日突然起こつたことが頭の中をグルグルグルグルと駆け巡り、爆発しそうになる。

たくさんのことを考えていたら疲れたのか、私はそのまま眠りについてしまつた。

昔の、風景。

桜が満開に咲き、他の家族やお友達が花見をして楽しんでいる。でも、家の窓から私はその風景を眺めるだけ。

小さい頃、私の家族は誰も私を必要とも、気にしようともしてくれなかつた。

『お母さん、なんで美和たちは外でお花見しないの?』

『……あら、あんたいたのね』

近くで母の袖を引っ張り、母に問うと、彼女はびっくりいいものを見るような瞳で私を見た。
でも、そこに私は映っていない。

父に聞いてみても。

「今は忙しいんだ」

としか返事をしてくれなかつた。
その瞳にも、私は映っていない。

誰か。

誰か！

誰でもいいから私を見て。
誰でもいいから、私の存在を認めてよっ！！

「 様。 美和様！」

誰かにゆすられ、ハツと目を覚ます。

「 ……夢？」

「 気がつきましたか？ うなされていたようですけど……」

目の前にいるのは、昨日に私を部屋に案内してくれて、ネグリジエを半ば無理やり押し付けてきた人だつた。

こげ茶色のショートカットで、優しそうな顔つきの若い女性。私の着ていたようなゴスロリではなく、本格的なメイド服。

彼女の名前はメフィー、だつた気がする。

「 申し訳ありません。外からお呼びしてもお返事がありませんでしたので、僭越ながら入らせていただきました」

「あ、いえ。全然」

なにが全然なのか。

自分でも疑問に思つような言葉で返答をする。

すると彼女は微笑んで、

「 美和様。ノワーフソン大臣がお呼びです。お着替えが済みました
ら、きて頂きたい」と

「ノワーフソン大臣？」

「先日美和様にこの世界のことについて簡単に説明をされていた大

御所の方です。大まかな説明は先日してしまったので、あとは今後
美和様がどのようになさるかについて口論するかと思われます」

「…………はあ」

あまりピンと来ずに、あいまいな返事をする。
すると一瞬で彼女の顔つきが変わった。

「では！ お着替えいたしましょう！」

「…………は？」

「ふふふ…腕がなりますわ！」

先ほどまでの優しそうな表情が嘘のよつにたぐらみに満ちた笑みへ
と表変する。

「え、ちょ、着替えくらい自分でできますよー…？」

「失礼します。…………あら、想像以上に大きいのですね。ではこちら
の方が…」

「つて、ど、どこの触つているんですかー…？」

その後着せ替え人形のよつにいじられまくった私は、多大な悲鳴を
あげることになった。

「美和様をお連れしました」

「ああ、入れ」

扉の前でメフィーさんが、ハキハキと言ひ。
それに美声が返事をした。

私はその部屋の中へと入つていいく。

見ると、中はやはり殺風景で、大きな丸机に、イスが数個。この城ののような大きな建物は膨大な広さだが、家具の一つ一つがあまり豪華ではなかった。どちらかと言つて、長持ちするようなものばかり。

「とりあえず、お前はこれからどうするんだ?」

突然、問われる。

いや、どうするんだ? って聞かれても、こっちが聞きたいのです
が。…とは言えず、

「えつと、先日は混乱していたのであまりよくわからなかつたのですが、もう一度、説明してもらつてもいいですか?」

もう一度説明を求める。

すると大臣さんが説明を始めた。

最も、昨日と似たようなことだけれども。

「先日も言ったように、この国ではクロウ殿下の魔力に値する未婚の女性がおりません。ですから、魔力の強い女性を召喚するためにこの召喚の儀式を行ないました。そして来られたのが貴女様です。

一方的に呼び寄せてしまったのはこちらの都合。故に、クロウ殿下の妃となるかどうかは、召喚されし者、つまり貴女様が決めることがあります。

しかし殿下は前王、つまり殿下のお父上とそのお妃様が亡くなられ、今は王候補の中の一人として名を挙げられている最中でございます。貴族や豪族など、各領主達の中でも口論を続けており、欲の多いものは陛下がお亡くなりになられたことによつて税金を上げ、民を苦しめる始末。

もともとこの国はほぼ絶対王政と言つても過言ではない国。前陛下の弟君が王の座に着けば欲をあらわにして、民を苦しめることが目に見えております。

我々にいたつては、どうしてもクロウ殿下に王の座を継いでほしいのです

「はあ」

曖昧に返事をする。

が、全く理解不能だ。

それにクロウ殿下は、短くため息をついた。

「ノワーフソン、話がずれている」

「ぬ、申し訳あつませぬ。

まあ、現状はここのようになつております。
もしクロウ殿下が王の座をお継ぎになれば、後継者が必要となります。

我々としては、どうにか美和様にはこちらの世界に残つていいただき、
殿下の妃となつて子を成して欲しいのです」

そういつて、深々と頭を下げる。
それに私は慌てる。

「あ、頭を上げてください！」

妃になるとがなんとか、つて言つのはなんとなくわかりました。
あと、この世界がグチャグチャだといふことも」

それに、ノワーフソン大臣は、ピク、と反応する。

あれ、言つちゃまずかつたかな？

そう思いながらも、あえてそこは無視し、話を続ける。

「ですが、私は元の世界に帰らないと、色々と支障ができるんです。
バイト先にも何も言つてませんし、学校だってあります。それに、
いきなり見ず知らずの人と結婚しろなんていわれても困ります！
私は帰らなければいけないんです」

支障が出るのは学校とバイト先だけ。
でも、私は帰らなければいけない。

それに、クロウ殿下が不思議そうに私を見る。

「帰らなくては、いけない？」

「はい」

「帰りたい、ではないのか？」

「……いいえ、帰りたいです」

即答、できなかつた。

彼は私の心を見透かすかのよつて下から上まで眺め、また笑う。

「そうか。だがしかし、お前の言うことに一理ある。

そうだな…、一週間。一週間で良い、この世界に滞在し、俺という存在を知つてはくれぬだらうか？ もしそれで意を改めてくれれば喜んで受け入れるし、まだ帰るとこにならば止めはせん。どうだ？」

その言葉はどこか自身にあふれており、私が帰らないとわかつているかのよつな口調だつた。

それに私は、頷くことしかできなかつた。

滞在三日目。

あと四日でこの世界からもとの世界へ帰る。

クロウ殿下は「俺という存在を知つてはくれぬだらうか?」なんて
いつていたけれど、実際やることも無くダラダラと過ごすだけで終
わりそうだ。

そんなことを考えながら天井を眺めていると、ノックの音とともに
優しげな聞き覚えのある声が聞こえる。

「美和様、おきていらっしゃいますか?」
「はあ、起きます」
「失礼します」
「どうぞ」

すると見覚えのあるメイドさん、メフィーさんが笑顔で中へ入つて
きた。

……ドレスのようなものを両手に抱えて。

「えつと、それは何でしょうか?」

嫌な予感が、する気がする。

しないとは言い切れない。

私が問うと、それにはメフィーさんは笑顔で答える。

「さあ、お着替えしましょ~!」

「え、ちよ、ま、待つてください~!」

必死に叫ぶと、メフィーさんは残念そうに手を止めた。
そして、私の目を見て聞く。

「このドレス、お気に召されませんか?」

違う。そういうことじゃないんです、と言ったかったが、先にドレスへと目を移したのが失敗だった。

「か、可愛い……」

薄ピンク色の下地に、フワフワとしたレース。
胸元は開いているが、大きすぎず小さすぎずのピッタリな状態。
膝下辺りまである丈に、軽そうな生地。

うかつにもそう呟いてしまつと、彼女は嬉しそうに言った。

「そうでしょう!?

美和様はこういったものがお好きではないかと、僭越ながら選ばせていただきました! では、お気に召されたことですし、お着替えを!」

「えつと、……はあ、わかりました」

メフィーさんの熱気 と言つても過言ではないくらいに押され、私は仕方なく頷いた。

無論、ドレスを着てみたかったのも事実。

「これはこれは美和殿」

そういうて、呼びかけてきた中年の男性。
誰だろ？

すこしそポツチャリした体形に、茶と金の混じったような、微妙な色
の髪の毛。

髪型は微妙なオールバックだが、意図して作っているものではなさ
そうだ。

無駄に派手で、豪華な服装。

「はい？」

返事をして、振り返った。

するといやりしい笑みを浮かべ、脂ぎった顔で彼はいつ。

「私が、現王のヴィーラだ。甥の花嫁になるそうだね？」

一瞬、なれなれしいな、とも思ったが、現王、つまりは前の王弟、大臣さんがカモフラージュに即位しているといった欲まみれの人だろう。

カモフラージュとはいえ、王様ならば態度がでかくても仕方の無いことだと割り切れる、と思つ。

「初めてまして、白崎美和です」しらさき

「おもしろい名前だね。甥とは仲良くしてくれたまえ」

そうじつて、わっぱは、と下品に笑つ。

おもしろい名前とはなんだ。お前だって相当おもしろい名前ですよ、と言いたくなる衝動を抑え、微笑む。おそらく引きつっているだろうが。

見ているものすくいらつぐが、我慢しなければならない相手だとこうのはなんとなくわかる。

「まあ、君が甥の妃になつたところで、とくに支障も無いのだがな」

まるで自分が全て、とでも言いたそうな表情。

こうじうタイプは嫌いな人種だ。

見ていいだけでイライラする。

すると突然、肩に重みがかかつた。

「叔父上、そろそろ彼女をかえしていただいてもよろしいでしょうか？」

心地よい、低い美声。

肩に手をまわされ、抱きかかえられている状態だと時間差で認識する。

「おや、クロウ。私が邪魔だといいたいのか?」「いいえ」

笑顔で即答。

しかしその笑顔の下は黒そうだ。
私は一刻も早くこの偽王を視界から外したくて、同じような笑顔でクロウ殿下に続けた。

「……すみません陛下。実は彼と会う約束をしていたもので」

本当は何も約束していない。

一瞬驚いたような表情を見せたが、クロウ殿下はそれに乗る。

「では、失礼しますね」

そういうつて私達は王弟の元をはなれた。
肩を抱かれながら。
やがて王弟が見えなくなると、私は全力で肩に置かれた手の甲をつまんだ。

「いつまで触つてるんですか?」

私はクロウ殿下の方を向き直る。

それにクロウ殿下は少し暗そうな表情をした。

「あの男に、なんていわれた？」

口調が上から目線。

この国で無理矢理私を連れてきたことに対する悪いと思う人はいるのだろうか？

それに口下手なのか、あの大臣さんにもしつかりとしたことを聞けなかつた。

「ただ、挨拶をしていただけです」

「それだけではないだろう」

「……あとは、私が貴女の妃になつたといふと云ふに支障もないとかなんとか」

そう告げると、彼は小さく舌打ちをした。

そして分かつた、と言つて帰る。する。

「ちょっと待ってください！」

私は反射的に彼の服の袖をつかみ、止めた。

「あの、私がこの国に来たとき、魔力を感じないとかなんとか言つてましたよね？」

あと、こんな『//』持ち女、とも言われた。

「それについて、少し聞きたいのですが」

「……帰る気ならば、関係ないのではないか？」

そういう彼の口角は、少し上がっている。

私がこの世界について問うことを待っていたかのようだ。王弟とは違う意味でいやらしい笑みを浮かべた。

「えっと……、帰りますけど、なんというか。

たとえ一週間であっても、滞在するのですから、何も知らずにバイバイは少し嫌なんです」

「へえ」

どんな言い訳だか。

彼は仕方がない、そういうことにしておいてやるか、といつような声色で返事をする。

そして、

「ついて来い

一言呟いて、また歩き出した。

つかんでいた袖が、手の中からすり抜ける。

無駄に長い廊下を歩き続けると少し他とは違った鳥のような、妖精

のよつた、植物のよつた、それらを足して三で割つたよつた、なんとも言えない絵柄のついた、大きな扉があつた。

その扉に手をかけ

「俺だ、入るぞ」

そういうと、中に誰かいるから声をかけただろつて、返事を待たず
に扉を開けた。

扉が開いた瞬間、私は絶句。

「なつ……」

やはり豪華、と言つにはなにか欠けていたが、それをものともせず
にズラリと並ぶ本棚の数々。

その中に隙間なくビツシリと敷き詰められた様々な本。

ここまで多い本は、学校の図書室でも、市の図書館でも見たことが
ない。

「おいやノン」

そういうてクロウ殿下が呼びかける。

その方向を見てみると、イスに座り、静かに読書をしている男性が
いた。

茶色い髪の毛に、物腰の柔らかそうな雰囲気の、美形。

誰ですか、と視線だけで問う。それに、その男性から返事をもらひ
なかつた彼は、はあ、とため息をついたうえで、

「アノン。俺の義弟だ、三番目の」

「へえー三番めの義弟さんですか、つて……義弟！？」

なんだよ三番目の義弟って！
すかさず突っ込みどころを逃すところだつた私は、少し声を荒げてしまつた。

「ああ、三番目の義弟」

「な。じゃあ貴女の『兄弟は何人いるんですか』

「全部で13人。そのうちの5人は女で、俺には兄が一人いた」

「いた、つて？」

「ああ、死んだよ」

あつたりそんなことを言ってのける彼。

そして、そんなことは気にも留めていない、といつた様子で、アノンさんとやりの肩をゆすつた。

「アノン、戻つて来い」

そういうと、それがスイッチだつたかのように、彼は田線を上げた。

「つああ、兄上、どうなさつたんですか？」

優しそうな声。

「どうなさつたのですか、じゃない。お前の集中力は素晴らしいものだが、周りを見ることを忘れるな」

「はあ、すみません」

ぼけーっとしたような声色で、彼は返答した。

オットリ系なのだろうか？

するとクロウ殿下は彼に向かつて言った。

「コイツに、魔術について説明して欲しい」

ああ、なるほど。

つまり面倒くさいことは人任せなんですね、クロウ殿下。

「魔術、についてですか？」

「ああ」

アノンさんはなぜ？

という風な表情をしていたけど、私を見るなりなにか勝手に納得して

「わかりました」

一言。

それにクロウ殿下はじゃあ、と言つて帰つていった。

訂正、逃げていった。

私は舌打ちしそうになる衝動を抑えながら、アノンさんに向き直る。それに彼は優しく微笑み、

「では。

この世界に魔術があるのは知っていますか？」

その言葉に、すこし驚く。

彼も私が異世界人だと言つことを知っていたのか。

……まあ、義弟なら当然かもしれないけど。

「まあ、なんとなく聞いたことがあります」

「そうですか。

魔術は多種多様で、物を動かしたり、空気中の酸素を利用して炎を出したり、人や物を壊すこともできます」

な、なんと物騒な。

彼は私が理解していることを確認すると、続けた。

「しかし、魔術を発動するためには、生まれながらの魔力が必要になります。これは遺伝的なものなので、己がどれだけ願おうが、どうすることもできません。

魔力の強い者は、たとえば普通の人人が掌サイズの炎しか出せないとすると、自分の体の大きさ以上の炎を出すことが可能になる、といった具合ですね。まあ、これは一例でしかありませんが。

そのため、この王国の頂点に立つものは他に劣らぬ強い魔力が必須になります。血縁でしか王にはなないので、その中で魔力の強い者同士が結婚し、子を成す。

そうしなければ魔力の強い子が生まれず、国が崩れてしまう」となる。

そういうことを防ぐために、王位継承者は魔力の強い者同士で結婚する義務があるのです。

おそれらく、そのために貴女は召喚されたのでしょうか。
もつここの国の女性で兄上に見合つほど魔力の持ち主はいませんから。

大臣は必死ですね。残り時間は少ないというのに、次の王補佐につかりとした現状を残していこうと頑張っててくれています

えっと、途中からなぜ大臣の話になつたんだろう?
顔にそれが出ていたのか、彼はクスッと笑つて説明をはじめた。

「大臣はもう少ししたら退職するんです。

年も年ですし、彼の役目は前王の補佐でしたから、次の王補佐を後継者に受け渡すんです。

確か孫が受け継ぐはずです」

「へ、へえ…」

つまりは、クロウ殿下の子供のために私は呼ばれ、大臣は途中放棄で逃げると?

「それにしても…」

彼は私を上から下までなめまわすように見据えると、一言呟いた。

「魔力を感じることができませんね」

あー。

「そりやあ、魔術云々なんてない世界にいましたから。あつたらこ

「ちが驚きです。アノンさんも」

「アノン、でいいですよ。

あと、敬語も必要です。これから義姉弟になるんですし」

「はあ、つていうか、別にしつなぬではないんだけど……」

「え、そつなんですか？」

「まあ。あと数日したら帰るし」

「それ、不可能ですよ」

「それ」「この世界にも　　つて、はあ！？」

あれ、今幻聴が聞こえた気がする。

彼はなんていいましたか？

「えつと……まあそれで私はもう少ししたらいの世界から帰らなく
ちゃ……」

「だから、それは不可能です」

「…………えーっと、どうせ帰るんだし」

「まあ、貴女がそう信じているのであればそれでもいいかもしだ
せんが」

現実逃避。

ああ、なんて素晴らしい言葉だろうか？

「この論議を今止めが必要としたのはない」と思ひ。

「ひょっと、詳しく聞きたいわね」

そういうて私はクロウに歩み寄った。
もう殿下も丁寧語も必要ない。

「イツは私を騙そうとしていたんだから。

この状況におちいったのは数分前。アノンが爆弾発言をして、私は
「一週間で帰るかどうかを決めてくれ」といったクロウにどうこう
ことか説明を求めるに彼の部屋へと押しかけてきたのだ。

「なんのことだ？」

「白を切れると思っているの？」

アノンが教えてくれたわ。私は元の世界に帰れないんですつて？
どうこうことなのよ！」

「はあ」

彼はそれを聞くと小さく息を吐いた。

「ちゅうど、聞いていいの!?」

卷之二

一
ノ
也
其
の
」

怒鳴ると、他の声で一言叫いた後が、背後にはベッド。

……私が使っている物よ」「ガガガしてないし
つて、なにをかんがえているんだ私！

「何するのよ？」

私は精一杯の力を振り絞つてキッと彼をにらんだ。

效果は薄そろたか

彼は黙れ、と言呴き、私の手片手で押さえつけると、もう片方で私の顎を押さえた。そして身動きのとれなくなつた私へと顔を近づけてきて。

だんだん視界が狭まつてくる。

が

「そやあああああああああああああああああああ」

そこで、私のものではない女性の悲鳴が聞こえた。

それにクロウは一度ちつ、と舌打ちをすると、すぐさま飛び起きて悲鳴の聞こえた方向へ走り出した。

私も、彼についていった。

時間差でクロウのいる、悲鳴の聞こえた場所へと到着した。
そこで見ると、巨大な炎が渦を巻いて城を燃やしていた。

紅の獣のごとく激しい業火。

燃え盛る炎はどんどんと城を侵食していった。

あと何分たてば私の滞在部屋にたどりつくだろうか。

何分も必要ないかもしね。

炎はこの大きな城をスッポリと包み込むような大きさで、威力を増していく。

その周囲では私が最初コスプレだと思っていた人達、兵士のような鎧をつけた男性達がタルなどで運んだ水をかけ、巫女さんのような服装の女性達は何か祈っている。

そしてそのほかの人たちは何かを唱えてはいたるところの水を操りつて、

「え、水が宙を浮いてる！？ なんで！？」

「ここの魔術だ。アノンから説明を受けただろう？」

「……こんなつかい方もあるんだ」

感嘆としていると、クロウは言った。

「でも、この程度じゃあこの火は消せないな」

そのとおりだった。

水をあらゆる面にかけていふとはいへ、炎の勢いが弱まることはなかつた。

それにクロウは一やりとする。

「丁度いい」

「は？ 何言つてるの？ 燃えてるんだよ！？」

「ああ。丁度今は力の強い魔術師達が宰相と一緒に出ている。今この場でこの火を消せるのは俺か、王弟か、アノンのだれかだ」

彼は何が言いたいのだろうか。

「でも王弟はアホだからな。自分の力なんてつかわないだろう。アノンはこの騒動に気づいていないと思つ、となると俺、になるが……」

そういうつて彼は笑んだ。
私を見つめながら……。

「な、丁度いいだろ？」
「だからなにがっん……つー？」

問おうとすると、突然口を塞がれた。
クロウの唇で……。

「ふあ……ん……がー！」

なにすんのよ、と講義しようとするが、自分でもなにを言つている

のかわからぬ。

意識が少し遠のこいへると、まくべつと歯が離れた。

「一度いいから、お前の魔力を解放してやる」

見慣れない天井。

窓から入つてくるまばゆい光。

クラクラして、さえない頭。

「何は？」

今まで何をしてたんだっけ？

私はぼーっとする頭をどうにか起動させ、横になっていた体を起こす。

と、最初に目に入ってきたのが、金髪碧眼の美しい男。

……あー、なんか思い出した。

思い出したせいか、イライラしてきた。

いきなり魔力を開放してやるだかなんだかいって、私の唇を奪ったのがこの男だ。

その、わ、私のファーストキスをクロウに奪われたんだ。

それからの記憶が無いのがなぜかはわからないけど。

それにはノンから聞いた話だと私は元の世界に帰れないらしい。ふざけんな、と講義しに行つたらこの様だ。

私は目の前のイスに座って寝ているクロウを見つめる。寝ても整っている綺麗な顔。

「……よだれの一つでも垂らしていれば可愛げがあるものを。

「あー、イライラする」

言葉に出しても、彼へのムカつきは消せなそうだ。

「美和様、お目覚めになられたのですね？」

「……っ！？」

不意に背後から声が聞こえてきて、一瞬ビクつとする。見るとそこにはメフィーさん。その手には食事が持っていた。

「……口も脛ついていらっしゃったのですよ。
どうぞ、お召し上がり下さい」

食事が差し出され、お腹の音がギュルルと鳴る。

今更ながらお腹が減っていることに気づいた。

私が食事を受取り、食べ始めると、メフィーさんが頭を下げる。

「先日は、調理師たちの不注意から起きた火事を止めていただき、ありがとうございました」

「……はい？」

何のことだらうか。

確かに現場にはいったけれども、何もしていない気がする。

「美和様が魔術師のいないときに城を己の魔術によって救つてくれ
さり、美和様をクロウ殿下の妃にすることに対しても反感を持つてい
た者たちが、ほとんど黙つてしまつたのです。田には田を、ですね！
さすがですわ！」

そういうて自分のことのように嬉々とするメフィーさん。
え、何の話ですか？

ちょっと待つて、おいてかないで！

あたふたしていると、うるさいぞ、といわんばかりの口調でクロウ
が話しに入ってきた。

「俺が開放したおかげで、お前の魔力が外に出たんだ。
強力な魔力故に、この城にいる誰にも見えなかつたものがな」

「……起きてたの？」

「今起きたんだ」

私の問いに当たり前のように答えるクロウ。
そりやそうですねー。

「なんで、その、私の魔力を解放するのに、そ、その……キス、し
たの？」

最後の方の言葉の力が弱くなる。

これでも恋愛は初心者で、キスはあるか、プライベートで男性と手
をつないだこともないのだ。

それも、好きな男性だったらもつとドキドキとかしたかもしけない
のに、こんな奴に奪われては私の唇が不憫で仕方がない。

「別にキスである必要は皆無だった。

お前の体内に俺の魔力を流し込み、魔力を抑えていた分厚い扉を開ければいいのだからな」

「いや、 だつたらしなくてもいいじゃない！」

「面倒くさいじゃないか」

「キスするほうが面倒くさいわよ……」

なんだら「」の男は。

ただの変態か？

そんなことを考えていると、メフİYEーさんが言ひ。

「ただ単に美和様と接吻したかつただけですよ」

「は？」

「それにクロウ殿下は面倒くさい面倒くさいといいながらも、三日間ほんどの部屋を離れずに美和様が田を覚まされるのを待ち望んでいましたし。

クロウ殿下にしては珍しく、他人に好意を持ったみたいですね。 さすがは美和様です」

え。 それは本当だろうか。

あんなに嫌味だった男が私が田を覚ますのを待ち望んで三日間もそばにいただなんて。

そういうことをされたためしがないからか、少し複雑な気分になつた。

私が恐る恐るクロウの顔を見ると、彼はブイツと田を逸らし、無愛想に言つた。

「メフİYEー。 僕がいつそんなことを言えといった？」

「いえ、 命令はされてませんわ。」

クロウ殿下はクーデレ兼、シンチラで、そのうえ感情表現が苦手のようですから、私が代わりに言って差し上げようかと

「余計なことはしなくて言」

「ふふ、申し訳ありません」

「シコリ微笑みながら謝罪するメフィーさん」、頭を抱えるクロウ。何だらう?

殿下とメイドにしてはヤケに親しい感じがする。それにもメフィーさんがクロウのことを知りすぎている気もする。だからと言つて恋人とかでもなさそうだし……。

あ。

「お母さんと思春期息子」

うん。これが一番しつくりくる。けど、クロウは心外そうな顔でこちらを見た。

「何の話だ」

「だから、あんたとメフィーさんの関係。そんな感じしない? まあ、少し年が近い気もあるけど」

「しない。

それにもメフィーはもう五十代だ。年も近くない

「え、嘘!?

メフィーさん50代なの!?

てつきり二十歳前後かと……

「え、そう見えますか?

ふふふ、嬉しいですねー。」

「若作りが上手いだけだ…」

ボソッとクロウが呟くが、メフィーさんは気にも留めない。さすがだ。

人生経験がものを言うのだろうか？

なぜかこのとき、イライラしていたはずなのに、メフィーさんの一言で少しクロウに好感が持てた。

クロウの皿の下につりあうとあるクマをみては緩んでしまった。なる口元には気をつけなければ。

今は少しだけ気分がいいので、みんなある疑問は後日にでも聞いてじつせ帰れないのだし。

……あ、やつ思つたらまたイライラしてきた。

第九部（後書き）

お気に入り登録、評価してくださった方、ありがとうございます！
第一章はここで終わりになつてしまいますが、まだまだ続く予定です
ので、今後もご覧になつてくださいと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6785x/>

異世界の花嫁

2011年11月2日19時15分発行